

A-121 食品の嗜好性に関する研究 (第4報) 児童の健康度と唾液PHによる検討
大阪信愛女学院短大 家政 ○垣本 充
近畿大 医 公衆衛生 三戸秀樹

目的：食品の嗜好性に関しては多くの研究がある。演者は既報で食品の嗜好性をその心理学的側面から検討を加え、小学生と幼稚園児について、食品の嗜好性と性格特性との間に共通な関連を見い出した。すなわち、情緒安定児は不安定児に比べて、野菜類を嫌う傾向を示すこと等である。このように、食品の嗜好性は幼児、児童に精神的な影響を与えているのではないかと推察される。そこで、今回は食品の嗜好性の児童への身体的な影響を調べる意味で、身体的健康度及び唾液のPH検査等の生理学的検討を行なった。

方法：調査対象は10～12歳の女子小学生102名、嗜好尺度は hedonic scale を用い、28品目の食品の嗜好調査及び、FATテストによる身体的健康度調査は、それぞれ記名アンケート方式により記入させた。唾液検査は口中清浄後、採取した唾液を直ちに Beckmann Expandomatic SS-2 PHメーターを用いて測定した。唾液PHに関する群別は $M \pm \frac{1}{2} S.D.$ の範囲をⅡ群(7.49～7.79)、それ以下をⅠ群(7.48以下)、それ以上をⅢ群(7.80以上)のように統計学的に3つの群に分類した。各群別の嗜好度の有意差検定はセーテスト法によった。

結果：身体的健康度及び唾液PH両面について、野菜類に関して特異な傾向がみられた。身体的健康と認められた児童は不健康と認められた児童に比べて、野菜類10品目のうち、キャベツ、白菜、キュウリ、トマト、大根、人参、ジャガイモ、ナスビの8品目に於いて、それらをより好む嗜好度を示すこと、唾液PHについてはⅠ群の児童はⅡ群又はⅢ群の児童に比べて、キャベツ、白菜、キュウリ、玉ネギ、大根、人参、ナスビの7品目に於いて、それらをより嫌う嗜好度を示すことを両データーとも危険率5%水準で認めた。